

# プリントとブログで多くの人にアピールを

## ベルマーク便りコンクール佳作 東京・大田区立矢口小

東京都大田区の区立矢口小学校（井上光広校長、児童521人）が初めての応募で佳作を受賞しました。応募作品はプリントとブログのふたつの形式。プリントはベルマーク担当の保護者が、ブログはPTA活動の広報を担当する保護者が更新しています。異なる形式でのアピールが多くの人に関心を高めることにつながっています。

応募を決めたのはPTA副会長の川住雅美さん。初めは分からないことだらけだったそうですが、財団ホームページを読みこんで、運動のしくみについて知識を深めました。そのように得た情報を反映したのが「ベルマークだより」。3枚のうち、2枚は川住さんが作成、1枚はウィークデイサポーターの中野舞さんが作りました。

ウィークデイサポーターは、ベルマークの集計や平日の行事のサポートをしている保護者です。同校ではコロナ禍以来、協賛会社ごとのキャビネットを設置。マークを持ってきてもらった時点で仕分けてもらうため、サポーターはすでに会社別になったマークを自宅に持ち帰り、集計することができるようになりました。



①活動に携わるウィークデイサポーターの皆さん ②ベルマーク番号別に仕分けることのできるキャビネット ③マークの整理をする「集計会」

このように個人で出来る体制を整えてきましたが、コロナ禍が落ち着いてきた今年度、サポーターの皆さんはある提案をしました。それが「自宅で、一人で作業するのではなく、みんなで集まり、さらにボランティアを募ってみたい」というもの。実際に集まってみると、「コロナ禍で希薄になっていた保護者間の交流の場の大切さを感じる事ができた」と川住さん。そして、ボランティ

アを募集するにあたり必要だったのがプリントとブログでの呼びかけです。特にブログでは、集計会の様子を写真に撮って紹介することで、場の雰囲気をもリアルに伝えることができました。

今後の目標は18個の傘立て。集めたマークを全校児童に還元できるように、クラス数分を目標にしました。目標金額の達成は、着実に近づいています。

# 不思議な現象に夢中／「クリオネ、かわいい！」

## 新潟・長岡市立太田小中と群馬・中之条町立六合中で理科実験教室

新潟県長岡市にある市立太田小中学校（渡邊節子校長、児童46人）で11月30日、財団のへき地校支援事業のひとつ「理科実験教室」が開かれました。講師は富山大学教育学部准教授の月僧秀弥先生です。

月僧先生がまず取り出したのは、小さなガスボンベのような容器。ふたを開け、中に入っている液体を別の容器に移すと、なんと霧のような白い煙が発生し、机から体育館の床に広がりました。「これは液体窒素。マイナス196度で沸騰するから一瞬で気体になるんです」



自分たちで実験もしました。透明のプラスチックコップを2つ用意し、底同士をテープでくっつけて砂時計のような形にします。くびれの部分にクリッ

プを付け、輪ゴムをクリップにひっかけてくびれの部分でグルグル巻きにします。そしてコップを回転させながら飛ばします。飛ばし方によっては、野球のカーブのように曲がったり、ブーメランのように戻って来たり。

月僧先生は「『マグヌス効果』とか『ジャイロ効果』といって大学で勉強する現象。テレビや本で見るとは違い、実際に自分でやってみると、よく分かると思います。これからもいろんなことを体験して、なぜそうなるのかよく考えてください」と子どもたちに伝えました。

群馬県中之条町の町立六合中学校（桑原武史校長、生徒9人）では、1月16日に理科実験教室がありました。講師は北海道紋別市にある道立オホーツク流氷科学センターの学芸員、桑原尚司さん。「クリオネ先生」の愛称で知られ、新種のクリオネを発見した研究者です。



この日は大雪のため、学校は臨時休校に。このため急ぎよ、出勤した教員たちに向けて授業を行い、その様子



をビデオ撮影することにしました。

「ダイヤモンドダスト」や「過冷却」の実験を披露すると、「おお、すごい」と先生たち。桑原さんは授業の最後に「この当たり前が世界の当たり前とは限りません。広い視野を持って色々なことに興味を持って欲しい」と、ビデオを通じて生徒たちに呼びかけました。

翌17日、登校した生徒たちは実験の様子をビデオで見ました。そして、桑原さんから贈られた本物の流氷とクリオネと対面。生徒たちは、「かわいい」「パタパタしてる」と歓声をあげていました。

先生は「六合という地域で生活している子どもたちにとっては視野を広く持つことができ、今後の生活に生きると思う」と感想を話しました。



# なぜ?で学ぶ土砂崩れのキケン

## 奈良市立辰市小で防災科学教室

奈良市立辰市小学校（伊田隆校長）で1月19日、防災科学教室が開かれました。2学年ごとに3回に分けて開催され、計約250人の児童が参加しました。防災科学教室は、国立研究開発法人防災科学技術研究所（防災科研）と財団が共催する自然災害への備えを学ぶ教室です。防災科研広報・ブランディング推進課の砂見吏佐さんの報告をもとに紹介します。

講師は、防災科学研究員の石澤友浩さん（水・土砂防災研究部門）です。

今回のテーマは「雨や地震で山や地面がキケン！なぜ？そしてみんなができること」。土砂崩れや液状化など、地震や雨によって「どんなことが起きるのか」「なぜそうなるのか」を、石澤さんが記録画像や実験映像を使って説明しました。

盛り上がったのはクイズ。スライドに映し出された問題を見ながら、児童たちは両手で○や×を作って答えて

いました。ふだんは教室で机の下にもぐって身を守る訓練をしている子どもたち。今回の開催場所が体育館だったこともあり、「机がない場所で地震が起きたら」の身の守り方や避難の仕方などのアドバイスを受けました。

小学校の近くに川があることから、石澤さんは学校周辺のハザードマップを示して氾濫が発生したときの注意や避難経路で想定される被害などを分かりやすく説明しました。最後に「避難場所に避難するのではなく、安全な場所に避難することが大事」「災害用伝言ダイヤル171を家族の間で共有し、番号を覚えておくこと」の2点については必ず覚えて帰るようにと、児童たちにお願いました。

教室の後、武内寛康教頭から「私自身もそうですが、ほかの教員からも大変分かりやすく児童たちのためになる講演だったと声があがっていました」と感謝の言葉がありました。

